

特集に当って

松田 寿子

労働省が去る10月15日に発表した婦人労働白書によれば、女性の職場進出はさらに高まり、全雇用者に占める女子雇用者は34.6% (1418万人) に達したという。とりわけその伸び率に注目すると前年比1.9%の伸びで、就業者と完全失業を合わせた男子の労働人口の伸び率が0.7% (女子はやはり1.9%) であることを考えると、女性の有職比率は着実に高まっている。

さらに興味深いのはその構成比率で、昭和37年当時の女子雇用者の構成比は未婚者が55.2%、有配偶者が32.7%であったのが、昭和57年には未婚者が31.5%、有配偶者が58.8%となり、まさに20年間に逆転現象を生じたわけである。私もその構造を支えた1人として感慨深いものがあるが、質的な面となるといまひとつ物足りなさの残る感を禁じ得ない。すなわち待遇面から見た女子平均賃金は男子のそれに比べ約半分の52.8%にしか達せず、この背景には年々高まる生活費の負担増を補なうべくパートタイム・ジョブに従事する人たちも含まれるので、女子雇用者の就業構造に見合った帰結といえなくもないが、女性の高学歴化ともなる社会進出への意欲が男性と対等に充足されるには未だ時間を要すると思われる。

ともあれ、私たちが就職した当時は「職場の花」とうたわれた女子の労働力もいまや「腕まくり女性の時代」等という見出しが新聞に出るご時世である。いましばらく忍耐強くしのげばそのうち男性のパートタイム・ジョブ従事者が女性のそれを上まわる時代になるかもしれない。これは単なる空想ではなく先頃訪れたジュネーブのILOでのワークシェアリングに関する研究の1つにジョブ・シェアリングという考え方があり、特にヨーロッパにおける深刻な失業対策の1つとしてボランティアの発想にもとづいて1つの仕事(ジョブ)を数人で協力して分け合うというものであった。したがって目的に応じた能力を有する人たちが男女のへだてなく寄り集まるとすれば、起こり得る現象として興味深いものであった。

前置きが長くなったが、今回は男性の編集諸氏待望(?)の女性研究者特集である。これまでに女性の編集委員が出現しなかったことへの欲求不満が吹きだしたのか否か定かではないが、今年の5月に辞令を受け、編集委員会に出席した途端にある男性編集委員から女性研究者特集を組んでみたらどうかという声があがった。すかさず編集委員長の賛同があり、その意義についてOR的議論も見ぬまま決まった次第である。「OR的議論も見ぬまま」というのはよく考えてみるとなかなか含蓄のある判断であって、女性の活力の活性化が叫ばれて久しい近時の状況を直感的に読みとり素早く判断した結果であろうと私なりに納得し、特集を引き受けさせていただいた。ともあれ、冒頭に述べたデータに証明されるように、3人に1人が女性労働者という環境にあってはタイムリーな企画というべきであろう。やはり人間の直感は素晴らしいものがあり、コンピュータで再現するのに最も手間どる部分ではあるまいか。

OR学会の女性会員は学生会員も含めて全体で約50名ほどで少々寂しい。女性研究者の数も確たる数字を見出せないが、いくつか思い当たる研究機関や大学の様子からいってもその数はまだ少数であろう。今回の特集はそのような素地を考慮して女性正会員全員に原稿をお願いしたところ5名の方々に快くお引き受けいただきました。さらに会員以外関連分野から2名の方にもお願いしました。日頃の刻苦勉強に裏打ちされた自信の賜物と敬意を表し感謝申し上げます。ORの研究にはコンピュータの利用が不可欠である。昨今の情報処理技術者の増加にもない、女性の技術者も増加してゆくことを考えればORの女性研究者のポテンシャルは拡がってゆくはずであるし、その応用領域もORの研究が始まった当初の作戦的なものから企業へ、そして家庭へとだんだん女性の適性に合致したものに移ってゆくことが予想される。このような状況を考え合わせて今後さらにORの女性研究者が増えてくることを期待したい。やがては女性の特集が特集ではなくなることを願うものである。

まつだ としこ 日本アイ・ビー・エム